The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	復活！現地でのコミュニティ・ラーニング
Author(s)	石塚, 裕子; 渥美, 公秀
Citation	未来共創. 2023, 10, p. 289-297
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/92510
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

復活！
現地でのコミュニティ・ラーニング

石塚 裕子
大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター講師
渥美 公秀
大阪大学大学院人間科学研究科教授

1．はじめに

コミュニティ・ラーニングは今年で10回目を迎えた。この授業は、2013年度からリーディング大学院未来共生イノベーター博士課程プログラムの必修授業としてはじまり、2020年度から大阪大学大学院人間科学研究科学修証明プログラムとして、また選択科目として実施している。今回は14名の学生が受講した。

昨年、一昨年は新型コロナウィルスの拡大により、現地での開催が阻まれ、オンラインでの講義とインタビューによる「オンラインフィールドワーク」という形式をとってきたが、今年は、ようやく現地での9日間のフィールドワークが実現した。本授業の特徴は、学生たちが自由に野田村を動き回ることを推奨している点にある。村民と直にコミュニケーションをとることを重要視し、話を聴かせてもらうためのアポイントをとることから始めて、興味をもった事柄について深める又は広げるためには次に誰に話を聴くべきか、どこへ足を運ぶべきか、どのような情報を収集すべきかなど、フィールドワークを自ら組み立てることを課してきた。14名の学生たちは、その趣旨通り、野田村を駆け回り、延べ30名以上の方々に出会い、話を聞かせてもらい、交流を通じて多くのことを学んだ。

全体の共通テーマは「持続可能な野田村の創生」とし、震災・津波から11年を

石塚裕子；y-ishizuka@hus.osaka-u.ac.jp

経て新たなステージを迎えた野田村が、今後も持続可能な地域であり続けるために取り組むべきことは何か、野田村の人たちと考えることを目標とした。「野田村の生業」、「野田村への地域愛着育成の取り組み」、「野田村の外部とのつながり」、「野田まつりへの村の人々の思い」という4つの切り口で取り組んだ。

「野田村の生業」では、野田村の漁業と鉱山観光に着目し、代々生業を継いでいる村民だけでなく、IターンやUターンして野田村の生業に就いてる村民から何度も話を聞かせていただく中から、異なる生業や考え方を共有し多角的な視点を取り入れることの必要性を提案した。そして学生たちは「野田心」と名付けて、村民一人ひとりの資質が野田村の生業を支えていることに気づいた。「野田村の地域愛着育成の取り組み」では、「人」に着目し、3名の村民のライフヒストリーを聞かせていただいた。そして野田小学校が取り組む野田村の「よさ」を知ること、伝えることが地域愛着を育んでいることを知る。しかし、野田村のの「よさ」を知り地域愛着をもつことと、一人ひとりが「生きる」ことの乖離にも気づいた。その上で、野田村の「よさ」を失わないことの重要性を提案している。「野田村の外部とのつながり」では、村のキーパーソンから話を聞く中で、東日本大震災前後で村民の外部の人に対する意識や捉え方が、閉鎖的だったものが開放的に変化してきたことを知った。さらに「今回インタビューした人が村民全ての意見なのか？」と疑問を感じ、自分たちが聞き取れていない村民の存在を認識したうえで、村一体となって外とつながる必要性を提案した。「野田まつりへの人々の思い」では、村の一番大きな伝統行事である「野田まつり」に着目した。新型コロナウィルス感染症の拡大により2年間中止し、3年ぶりに開催されるというタイミングで、村民の野田まつりに対する様々な想いを聞き取っている。そして、野田まつりへの村民のかかわり方の多様性に気づき、村民が主体だけでもなく、客体としてだけでもなく、野田村村民がそれぞれの距離感でまつりに関わる「共同的な構造」を見出した。

次章では、各班の取り組みを受講生による報告書からの抜粋で紹介する。

2．学生の取り組み

本章では、学生たちが執筆している「コミュニティ・ラーニング2022　東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書」の各班の要旨を紹介する。

図 1　野田村の「荒海ほたて」（撮影：劉 慧銘）

2-1.　野田村の生業について

宮本　幸乃（みやもと　ゆきの）
人間科学研究科 社会学・人間学系 社会環境学講座
劉　慧銘（リュウ　ケイメイ）
人間科学研究科 社会学・人間学系 社会環境学講座
マイレイア　アジャティ
人間科学研究科 共生学系 グローバル共生学講座

私たちは「持続可能な野田村の創生」の大テーマのもと、特に野田村の生業を中心に調査を行った。地域に根差した産業や働きたいと思える場所があることが野田村の持続可能性には重要であると考えたためである。そのうえで野田村の生業の中でも漁業と鉱山観光およびマリンローズという鉱石に関する産業に焦点を当て、半構造化インタビューを用いて、野田漁協組合の小谷地さん、安藤さん、嶽間沢さん、外舘さんとマリンローズパーク野田玉川地下博物館館長の城内さんにインタビューを行った。調査後に①野田村で働くということ②

野田村の産業の現状③課題と対策の3つの観点からインタビュー内容を整理し、次のようなことを明らかにした。①では世代や職業選択の経緯が異なる中でも同様の辛さややりがいを感じていることが明らかになった。②のうち漁業では東日本大震災の影響を受けながらもそれを糧にし、ブランド作りを進めていることが明らかになった。マリンローズに関わる産業では新しい人が関わることで一層の発展を遂げようとしていることが明らかになった。③では漁業とマリンローズに関する産業のどちらとも存続の危機に瀕していたが、持続していくために様々な課題を明らかにし、それに対処しようと試みていることが明らかになった。

これらを踏まえた考察として、次の3点にまとめた。①それぞれの考え方の違いを共有することで生業の持続可能性が高まるのではないか。②また一見異なる産業であっても共通する課題を抱えており、協働して解決していくことが出来るのではないか。③課題の解決策には多角的な視点を取り入れることでより幅広く受け入れられやすい対策が可能になるのではないか。これらの考察を踏まえ、私たちが野田村の生業の持続可能性を高めるために出来ることを提案した。

結論としては、野田村の生業を持続していくためには現在の課題を解決することだけでなく、私たちが「野田心」と名付けた、村民一人ひとりの資質が野田村の生業を支えていることが重要であると考えている。

2-2. 野田村への地域愛着育成の取り組み
ー「よさ」の教育と発信に注目してー

秋山　みき（あきやま　みき）
人間科学研究科 共生学系 未来共生学講座
SHAN XIAOCHEN（しゃん　しょうちぇん）
人間科学研究科 行動学系 行動生態学講座
NI TINGTING（ニ　ティンティン）
人間科学研究科 共生学系 グローバル共生学講座

私たちは、「持続可能な野田村の創生」というテーマのもと、近年の人口減少や少子高齢化の影響を踏まえて、「人」の重要性に着目して野田村でのフィールドワークを行った。「持続可能な野田村の創生」に向けては、野田村を「残りた

い／戻ってきたい」あるいは「行きたい／帰りたい」と思える村にしていくこと、そしてそのことが新しい世代やこれまで野田村と関係をもっていなかった人にまで伝播していくことが求められていると考える。こうした村づくりの実現過程を検討していくために、「地域愛着」という視点から村の方々の語りや取り組みを検討した。

現在野田村に在住することを選択している人々は、何らかの形で野田村という地域に対する愛着をもっており、そうした感情が、野田村にいることを選択する重要な要因になっていた。その際、地域愛着とは、周りの人との絆や昔の思い出といった、人々を野田村に結びつける見えない糸のような役割を果たしていた。さらに、このような愛着を有する人を若い世代や村の外にも拡大していくために、野田村の行政や学校、産業が連携しながら様々な取り組みを行っていた。それは，野田村の「よさ」を知る取り組みと「よさ」を伝える取り組みという2つの枠で行われていた。

「よさ」を知るための取り組みでの体験や野田村の外への「よさ」の発信など、

図2　小野寺信子さんと一緒に（撮影：秋山みき）

いくつかの経験や出会いの中で、あらゆる人が野田村の魅力に気づき、「残りたい／戻ってきたい」あるいは「行きたい／帰りたい」という気持ちを抱くに至る。こうした地域愛着育成の一連の流れは、野田村がその「よさ」を生かしながら創生していく可能性を示唆している。

ただし、大学進学や就職などといったライフステージの変わり目に野田村を離れるという選択肢に接近している人々の語りもあり、野田村の「よさ」を知っているから住み続ける、野田村を愛しているから出て行かない、というような単線的なストーリーのみで「持続可能な野田村の創生」を語ることは不適切であることも見えてきた。野田村の「よさ」を周知していく試みの意義を十分に理解した上でも、より「生きる」ということに密着した場面においては、村との関係を選択する上で地域愛着とは異なる軸が用いられる合理性も見えてきた。「よさ」とそこで「生きる」ことの間のこうした乖離は、地域愛着の育成だけでは実現し得ない「持続可能な野田村の創生」のあり方があることを示唆している。

今後は、知る／伝える「よさ」そのものがなくならないようにしていくことの重要性、そして村を「出ていく」ことになった契機や「戻る」ことになった決定的な要因にも学ぶことがあることが示唆された。

2-3. 野田村と外部とのつながり

川端　映美（かわばた　えみ）
言語文化研究科 言語文化専攻
藤原　一男（ふじわら　かずお）
人間科学研究科 社会環境学講座
矢間　裕大（やざま　ゆうだい）
工学研究科 ビジネスエンジニアリング専攻 都市再生マネジメント領域
劉祥嬰（リュウショウエイ）
人間科学研究科 社会学・人間学系 社会環境学講座

私たちの班は、野田村の持続可能な発展について考える上で、「野田村と外部とのつながり」というテーマを掲げフィールドワークを行った。村の中と外のつながりはどのようにして生まれるのか、またそのつながりに対してどのような想いを抱いているのかについて、地域住民にインタビューすることで明らかにしたいと考えた。その結果、野田村では外部に対する意識や捉え方が、東日本大震災の前と後で変化したことを知った。野田村では震災前は外部の人に

対して抵抗感がある人が多数だった。しかし、震災後は様々な人々がボランティア活動などで野田村を訪れたことから、心理的な抵抗が薄れていき、外部との交流に意義を感じる村民が多数派になった。そして、外部との交流は野田村の人々が誇りをもつ効果が確認された。その一方で、今回のフィールドワークで私たちがつながった人たちは、外部とつながることを好意的に思っている人たちであって、今も外部と関わることへの抵抗や葛藤を抱く見えにくい村民が存在していることにも気付いた。

野田村は、地域と多様な関係をもち、地域づくりに貢献する「関係人口」の育成による地域活性化のモデルが徐々につくられつつある地域である。一方で、震災後も外とつながることへの抵抗をもつ人の存在にも気付いた。その理由を考えた結果、私たちは、抵抗感のある人への必要な対策を講じてメリットを実感してもらえるような工夫をし、コミュニティの中で外の人と交流できる場を作っていくことが必要であると提案した。そして野田村全体で外部の人を受け入れる体制をつくることが、野田村の持続可能な発展を可能にさせると結論づけた。

2-4. 野田まつりへの村の人々の思い

中島　千宏（なかじま　ちひろ）
人間科学研究科 行動学系 人間行動学講座
中野　立開（なかの　りく）
人間科学研究科 共生学系 未来共生学講座
西村　尋（にしむら　じん）
人間科学研究科 共生学系 未来共生学講座
楊　凌煙（Yang Lingyan）
人間科学研究科 共生学系 未来共生学講座

私たちは、3日間のフィールドワークを通して野田村の持続可能な発展について考えた。特に、野田村の村社である愛宕神社の例大祭で、村民に親しまれてきた行事のひとつである「野田まつり」に焦点を当てて、野田村村民にとって野田まつりがどのような役割をもつのかを調査した。調査対象は「野田まつり」の運営を担う野田村商工会の方や「野田まつり」のメインにあたる山車に関わる地域の方々、そして開催地となる愛宕神社周辺の住民であり、それぞれにイン

図 3　仲間とともに

タビューを行った。インタビューを行うことによって、「野田まつり」は野田村村民がそれぞれの距離感で関わる共同的な構造をしていることがわかった。そして、それによって「野田まつり」が村民の地域アイデンティティになっていることがわかった。野田村の持続可能な地域活性化には、「野田まつり」のような地域住民が中心となって形成されている文化や伝統を、その共同性を保持したまま拡大することが重要になると結論づけた。

3. おわりに

3年ぶりの現地でのコミュニティ・ラーニングは、野田村日形井地区にオープンした「野田村 ON&OFF Village　庵日形井」を拠点に実施した。静寂な自然環境が集中力を高め、星降る夜空が疲れを癒してくれるなど、とても充実した時間を過ごすことができた。やはり現地でのフィールドワークは、インタビューなどの活動をしている以外の時間や場が、偶然の出会いや気づきを得る機会となり、思考を深めてくれる。10年の歳月で培った野田村との関係が、再び活発化することを期待させるフィールドワークとなった。

最後になりましたが、学生たちの日形井地区での生活を温かく見守っていただいた内野澤進様、てる様、様々な場面でサポートいただいた野田村役場未来

づくり推進課小野寺修一様はじめ課のみなさま、チーム北リアス現地事務所長貫牛利一様をはじめ野田村のみなさまに、心より感謝申し上げます。

図 4　野田まつりの山車（撮影：矢間裕大）

図 5　野田村 ON&OFF Village　庵日形井にて（撮影：石塚裕子）